都城市文化財調査報告書第58集

横市地区遺跡群

江内谷遺跡・坂元Ｂ遺跡・加治屋Ｂ遺跡（第１次調査）

県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う遺跡の発掘調査概要報告書

加治屋Ｂ遺跡　中世遺構群（北西上空から）

２００２年３月２９日
宮崎県都城市教育委員会

序　　文

本書は、「県営担い手育成基盤整備事業横市地区」に伴い、受託事業として都城市教育委員会が発掘調査を実施した横市地区遺跡群の概要報告書であります。

都城市の横市地区では県営担い手育成基盤整備事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が平成８年度から継続的に実施されており、昨年度の坂元Ａ遺跡における国内最古級の水田跡の発見をはじめ、これまでにも数々の多大な成果が報告されております。

平成13年度の調査では、加治屋Ｂ遺跡において、弥生時代の竪穴住居跡群と中世の80棟を越える掘立柱建物跡が検出されました。特に後者につきましては、鎌倉時代の大規模な館跡であることが推定でき、南九州において貴重な調査事例となりました。また、それらの調査成果については去る３月17日に実施しました遺跡の一般公開において、多くの市民の皆様にご紹介したところでございます。

本書の刊行によって、こうした地域の文化財に対する理解と認識がますます深くなっていくことを願うとともに、今回の成果が学術研究の発展に少しでも寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に従事していただいた市民の皆様をはじめ、関係各機関の方々には多大なご理解とご協力をいただきました。心から感謝の意を表します。

2002年３月29日

都城市教育委員会
教育長　長　友　久　男

例　　言

1．本書は、「県営担い手育成基盤整備事業横市地区」に伴い都城市教育委員会が平成12・13年度に実施した横市地区遺跡群の発掘調査概要報告書である。

2．平成13年度の発掘調査地は、宮崎県都城市南横市町の加治屋Ｂ遺跡であるが、平成12年度に調査を実施した江内谷遺跡と坂元Ｂ遺跡は平成13年３月前半の段階において調査未完了であったため、あらためて本書にその概要を掲載している。

3．現場における遺構の実測は、作業員の協力を得て桑畑・下田代・原田・外山が行い、同市文化課の松下述之・矢部喜多夫・米沢英昭・久松　亮の協力を得た。なお、遺構実測図の一部を有限会社ジパングサーベイに委託した。

4．本書に掲載した貿易陶磁器と国産陶器の実測・製図は、大盛祐子が行った。

5．本書で使用したレベルは海抜絶対高である。

6．遺構の写真撮影は桑畑・下田代・原田・外山が行い、矢部の協力を得た。また、遺構の空撮は九州航空株式会社に委託した。

7．植物珪酸体分析等の自然科学分析については（株）古環境研究所に委託し、木製品の保存処理は吉田生物研究所に委託した。

8．本書は桑畑・下田代・原田・外山が分担して執筆し、編集は桑畑があたった。

9．第６章は大盛祐子氏が執筆し、第７章については宍戸　章氏作成のレポートに基づいて記述した。

10．発掘調査および概要報告書作成にあたっては下記の方々よりご助言・ご協力をいただいた。

甲元真之（熊本大学），上村俊雄（鹿児島国際大学），田崎博之（愛媛大学），前迫亮一（鹿児島県立埋蔵文化財センター），長津宗重・菅付和樹（宮崎県埋蔵文化財センター）

11．発掘調査で出土した遺物とすべての記録（写真・図面など）は都城市教育委員会で保管している。

目　　次

第１章　序　　説　　１）調査の経緯と経過……1
２）調査組織……1
第２章　遺跡の位置と環境……2
第３章　江内谷遺跡の調査……4
第４章　坂元Ｂ遺跡の調査……7
第５章　加治屋Ｂ遺跡の調査……11
第６章　馬渡遺跡・坂元Ｂ遺跡出土の初期貿易陶磁器と国産施釉陶器について……16
第７章　横市地区遺跡群出土の石器の石材について……19

挿　図　目　次

図１－１　九州全図……2
図１－２　遺跡分布図……2
図２　江内谷遺跡遺構配置図……5
図３　坂元Ｂ遺跡遺構配置図……8
図４　加治屋Ｂ遺跡中世遺構配置図……13
図５　馬渡遺跡・坂元Ｂ遺跡出土の初期貿易陶磁器と国産施釉陶器……18

写　真　目　次

１．横市地区遺跡群全景（西側上空から）……3
２．加治屋Ｂ遺跡とその周辺（北西上空から）……3
３．真上からの遺跡全景……4
４．江内谷遺跡遺構完掘状況……5
５．江内谷遺跡出土遺物（土師器）……6
６．江内谷遺跡出土遺物（黒色土器・緑釉陶器・越州窯系青磁・墨書土器・フイゴの羽口・木製品）　6
７．調査区全景（北西上空から）……8
８．調査区東側（真上から）……8
９．調査区西側（真上から）……8
10．５号溝状遺構［ＳＤ５］完掘状況（西から）……9
11．１・２号竪穴住居跡［ＳＡ１・２］（北から）……9
12．１号竪穴住居跡［ＳＡ１］完掘状況（南から）……9
13．１号竪穴住居跡［ＳＡ１］内土器取り上げ風景……9
14．２号竪穴住居跡［ＳＡ２］完掘状況（南から）……9
15．内部に手づくね土器の入った弥生土器壷……9
16．２号溝状遺構［ＳＤ２］完掘状況（東から）……9
17．７・８・９号溝状遺構［SD７・８・９］完掘状況（北から）……9
18．４号掘立柱建物跡［SB４］……10

19. 22号土坑［SC22］完掘状況……10
20. 10号土坑［SC10］内土師器出土状況……10
21. ５号土坑［SC５］内土師器出土状況……10
22. 縄文時代晩期～弥生時代中期初頭の土器……10
23. １号竪穴住居跡［SA1］出土土器（1）……10
24. １号竪穴住居跡［SA1］出土土器（2）……10
25. １号竪穴住居跡［SA1］出土土器（3）……10
26. １号竪穴住居跡［SA1］出土土器（4）……10
27. 北区弥生竪穴住居跡群完掘状況（南から）……12
28. 23号弥生竪穴住居跡［YSA23］完掘状況（西から）……12
29. 11号弥生竪穴住居跡［YSA11］完掘状況（南から）……12
30. ６号弥生土坑［YSC６］完掘状況（西から）……12
31. １号弥生掘立柱建物跡［YSB１］（南から）……12
32. 16号弥生竪穴住居跡［YSA16］覆土上層遺物出土状況……12
33. 12号弥生竪穴住居跡［YSA12］主柱穴内の土器出土状況（西から）……12
34. 25号弥生竪穴住居跡［YSA25］土器出土状況……12
35. 中世遺構群全景（真上から）……14
36. 南区中世遺構群（東から）……14
37. 29号掘立柱建物跡［SB29］（北から）……14
38. １・２号溝状遺構［SD１・２］（東から）……14
39. 43号土坑［SC43］土師器出土状況（東から）……14
40. 60号土坑［SC60］完掘状況（北から）……14
41. 130号土坑［SC130］完掘状況（北から）……14
42. 弥生土器甕（YSA16出土）……15
43. 弥生土器甕（YSA16出土）……15
44. 弥生土器甕（YSA21出土）……15
45. 打製石鏃（YSA18出土）……15
46. 弥生土器甕（YSA12出土）……15
47. 弥生土器壷（YSA12出土）……15
48. 土師器坏・小皿……15
49. 龍泉窯系青磁碗……15
50. 白磁皿・碗……15
51. 黄釉陶盤・褐釉陶合子……15
52. 常滑焼甕……15
53. 青白磁合子……15
54. 白磁水注高台内の墨書……15

第1章　序　　説

第1節　調査の経緯と経過

宮崎県都城市横市地区では、平成5年度に県営ほ場整備事業（平成9年度より県営担い手育成基盤整備事業に移行）の実施が採択された。平成6年度、宮崎県北諸県農林振興局から文化財の所在の有無について照会を受けた宮崎県文化課が一帯の分布調査を実施したところ、事業対象区域約170ヘクタール内において10遺跡、約44ヘクタールにおよぶ埋蔵文化財包蔵地の所在が推定された。その後、都城市教育委員会は宮崎県文化課が実施した試掘調査の結果を受けて、北諸県農林振興局と協議を行い、平成8年度から鶴喰遺跡の調査を皮切りに、記録保存のための緊急の発掘調査を実施している。平成13年度までに発掘調査した遺跡は以下の一覧表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	調査面積	調査年度	主な時代と成果
鶴喰遺跡	都城市横市町	8100㎡	平成8・9年度	古墳時代の集落跡・中世の館と水田跡
肱穴遺跡	都城市横市町	15000㎡	平成10年度	縄文時代～近世の集落跡と水田跡
今房遺跡	都城市横市町	3110㎡	平成11年度	弥生時代の集落跡・中世の水田跡
馬渡遺跡	都城市蓑原町	9900㎡	平成11・12年度	弥生時代の集落跡・平安時代の居宅跡
坂元A遺跡	都城市南横市町	2800㎡	平成12年度	縄文時代～近世の水田跡
坂元B遺跡	都城市南横市町	6300㎡	平成12年度	縄文時代～近世の集落跡・中世の畠跡
江内谷遺跡	都城市蓑原町	3100㎡	平成12年度	平安時代の集落跡・水田跡
加治屋B遺跡（第1次調査）	都城市南横市町	11000㎡	平成13年度	弥生時代の集落跡・中世の屋敷跡

平成13年度に調査対象となった加治屋B遺跡については、平成11年度の宮崎県教育委員会文化課による確認調査によって遺物包含層のひろがりが把握され、若干の遺構の存在も予想されていたが、その内容と工事計画とを照らし合わせた結果、切土によってほぼ全域に影響を受けることが判明した。その後、平成12年度に入り数次にわたって協議がもたれたが、最終的に総面積約2.1ヘクタールを平成13･14年度の2ヵ年にわたって（平成13年度：11000㎡，平成14年度：10000㎡）、発掘調査することとなった。調査期間は平成13年4月10日から平成14年3月27日までである。調査期間中、平成14年3月17日に一般市民対象の遺跡見学会を実施し、約200名の参加があった。

なお、平成12年度調査分のうち、同年度の概要報告書にその成果を掲載できなかった江内谷遺跡と坂元B遺跡の概要についてはあらためて本書に掲載した。

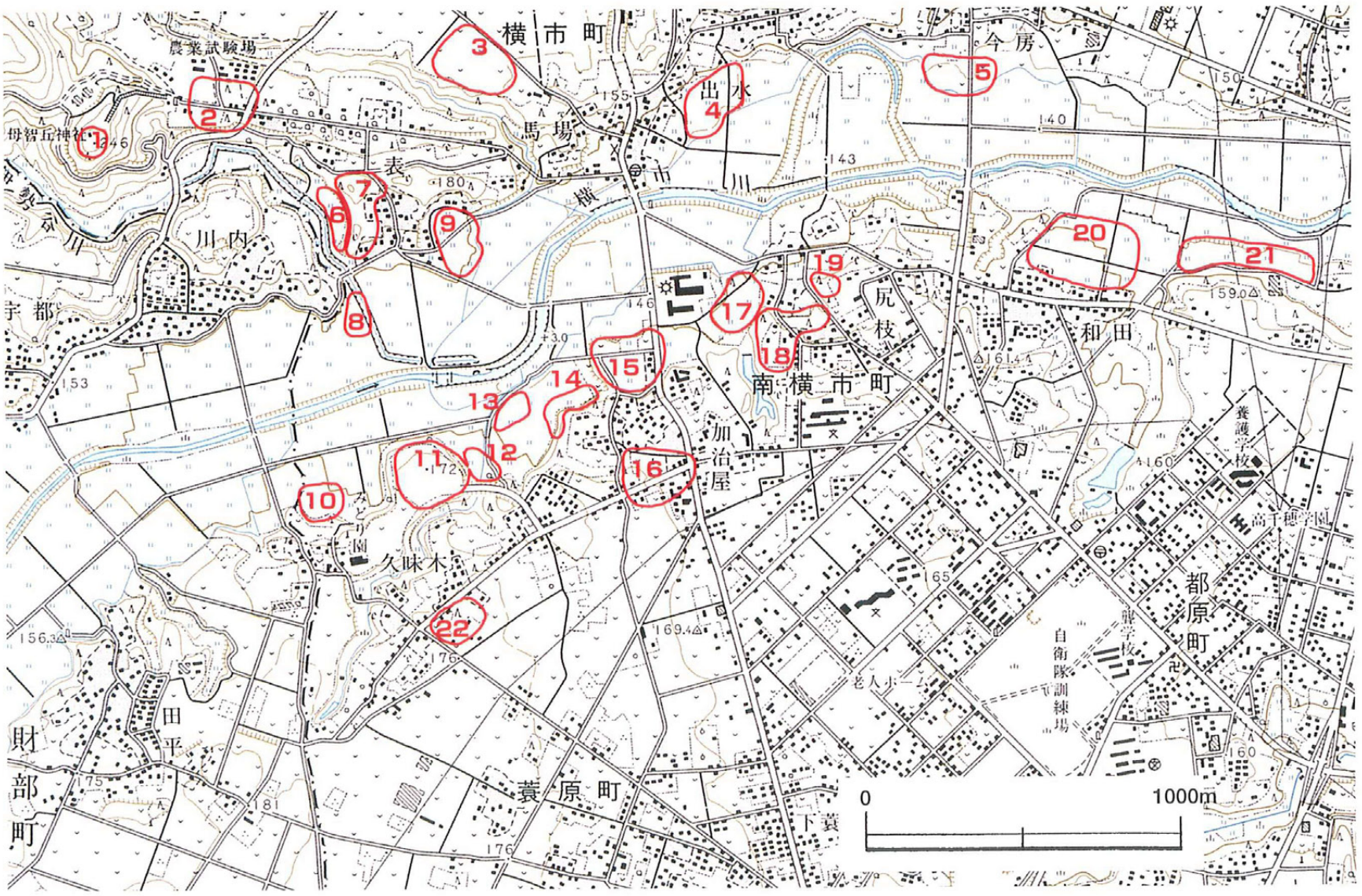
第2節　調査組織

・調査主体者　宮崎県都城市教育委員会
・調査責任者　教育長　　長友　久男
・調査事務局　文化課長　　内村　一夫
　文化課課長補佐　　盛満　和男（平成12年度）
　　坂元　昭夫（平成13年度）
　文化財係長　　堀之内　克夫（平成12年度）
　　奥田　正幸（平成13年度）
・調査担当者　文化課文化財係主査　桑畑　光博
　文化課文化財係嘱託　下田代　清海・原田　亜紀子・外山　隆之
・調査指導者　高橋　学（立命館大学），宍戸　章（宍戸地質研究所），山本　信夫（山本考古学研究所），
　中摩　浩太郎（鹿児島県指宿市教育委員会），禰宜田　佳男（文化庁），
　石川　悦雄・飯田　博之（宮崎県教育委員会文化課）

第２章　　遺跡の位置と環境

都城市は宮崎県の南西部に位置しており、都城盆地のほぼ中央部を占める。この盆地は九州の東南部にあり、南北約25km、東西約15kmの楕円状をなしており、北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を瓶台山や白鹿山などの山地に、東から南を鰐塚山・柳岳を主峰とする山地に囲まれ、西南方のみがわずかに開かれた地勢を呈する。また、盆地中央部を大淀川が貫流しており、多くの支流を集めて、南から北へと流れる。その大淀川を挟んで、東側の山地は比較的急峻で、起伏が大きく、その裾部には緩やかに盆地底へと傾斜する広大な扇状地が発達している。一方、北西に位置する山地は霧島火山の山麓にあたり、比較的緩やかなスロープとなる。その周縁から南にかけてはおおむね平坦で起伏の少ないシラス台地が広がっているが、西から東へと流れる大淀川の支流（北から丸谷川、庄内川、横市川）がその台地を分断しながら流れており、それぞれの流域に完新世段丘と後背低地の形成が認められる。横市川は鹿児島県財部町から、蛇行しながら都城盆地中央部へ向けて流れ、大淀川に合流する。横市地区遺跡群は、その横市川の両岸に所在する遺跡群を総称している。平成８年度からの調査で、縄文時代後期から近世にかけての遺跡が確認されており、前章の一覧表に示した数々の成果が得られている。

図1-1　九州全図



1：母智丘原第1　2：母智丘原第2　3：牧の原第2　4：肱穴　5：今房　6：畑田　7：新宮城跡
8：母智丘谷　9：鶴喰　10：馬渡　11：中尾山　馬渡　12：江内谷　13：坂元A　14：坂元B
15：加治屋B　16：加治屋A　17：星原　18：田谷・尻枝　19：胡摩段
20：平田　21：早馬　22：池原

図1-2　遺跡分布図

1. 横市地区遺跡群全景（西側上空から）

2. 加治屋B遺跡とその周辺（北西上空から）

第３章　　江内谷遺跡の調査

江内谷遺跡は、大淀川の支流である横市川南岸、開析扇状地の扇頂部（標高約150ｍ）に位置する。当遺跡は、元来、横市川南岸の河岸段丘であった台地が開析され谷地形および扇状地を形成したものと思われ、その谷は当遺跡より南南西約1.0㎞の所まで確認できる。

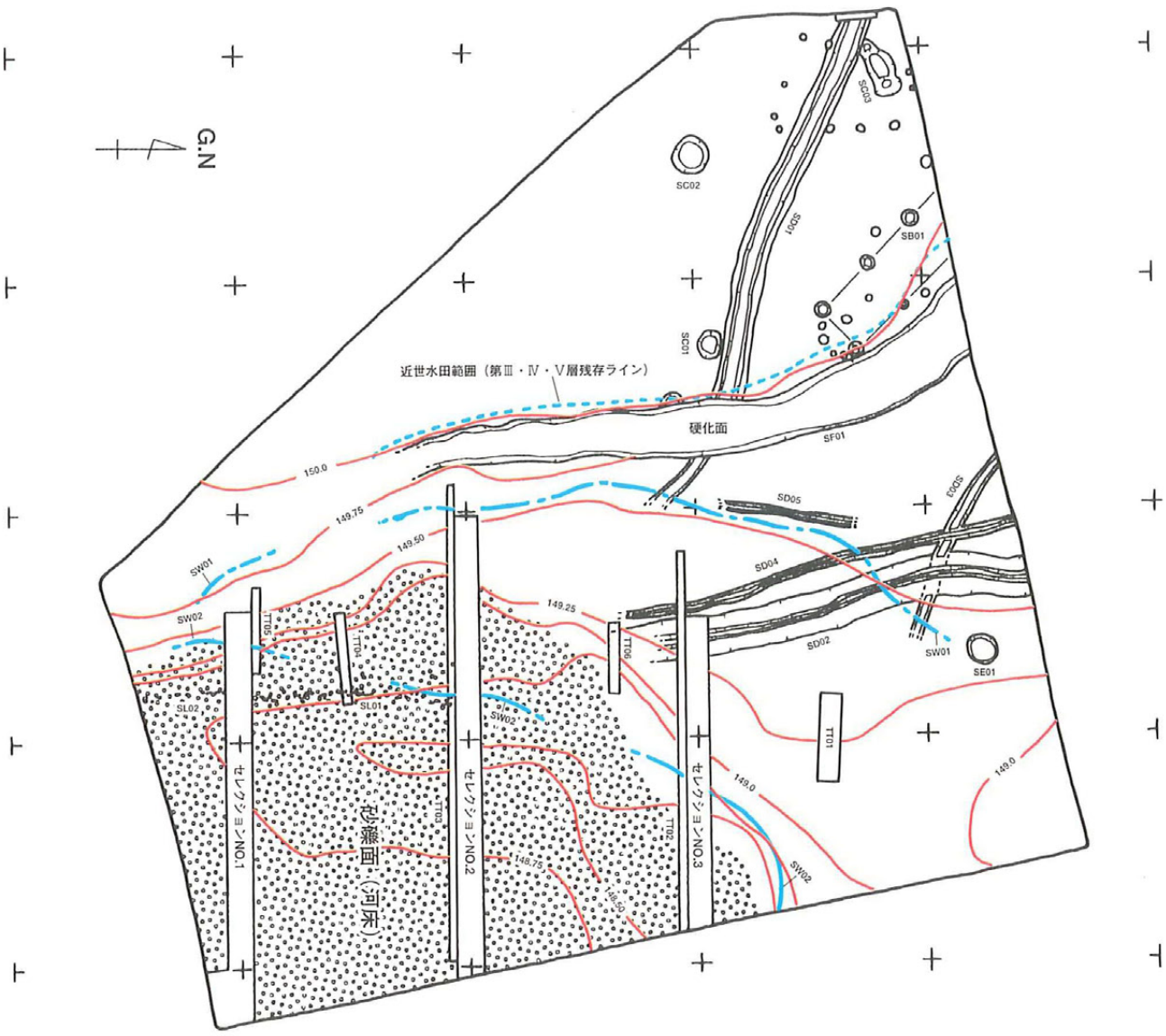
本調査は、約1,400㎡を調査区域とし、2000年11月24日より、2001年３月29日にかけて行った。

本遺跡の基本土層（概略）は、次の通りである。第Ⅰ層…灰褐色土（現代水田耕作土）。第Ⅱ層…灰褐色土・黒色土・黄橙色軽石ブロックの混合層（昭和の耕地整理造成土）。第Ⅲ層…褐灰色7.5ＹＲ 5/1砂質土（桜島文明軽石以降の水田耕作土）。第Ⅳ層…褐灰色7.5ＹＲ 4/1砂質土（桜島文明軽石以降の水田耕作土）。第Ⅴ層…褐灰色7.5ＹＲ 6/1砂質土（桜島文明軽石以降の水田耕作土）。第Ⅵ層…灰白色10ＹＲ 8/1軽石（桜島文明軽石｛1471年｝）。第Ⅶ層…褐灰色7.5ＹＲ 4/2砂質土（中世水田耕作土）。第Ⅷ層…黒褐色7.5ＹＲ 2/2砂質土（河成堆積物）。第Ⅸ層…黒褐色7.5ＹＲ 2/2砂質土（河成堆積物）。第Ｘ層…黒色Ｎ21砂質シルト（河成堆積物）。第ＸＩ層…灰褐色５ＹＲ 4/2砂質土（河成堆積物）。第ＸⅡ層…暗赤褐色５ＹＲ 3/2砂質シルト（河成堆積物）。第ＸⅢ層…砂粒・５～50㎜の礫の混合層（河成堆積物）。第ＸⅢａ…黒褐色7.5ＹＲ 2/1砂質シルト（河成堆積物）。第ＸⅢｂ層…砂粒・５～20㎜の礫の混合層（河成堆積物）。第ＸⅢｃ層…黒色7.5ＹＲ 2/1弱粘質シルト（河成堆積物）。第ＸⅣ層…黒色10ＹＲ 2/1シルト。第ＸⅤ層…第ＸⅣ・第ＸⅥ層の混合層（漸移層）。第ＸⅥ層…黄橙色10ＹＲ 7/8軽石（御池軽石）。第ＸⅦ層…黒色7.5ＹＲ2/1弱粘質シルト。第ＸⅧ層…灰白色10ＹＲ 8/2火山灰土（アカホヤ火山灰）。第ＸＩＸ層…浅黄橙色10ＹＲ 8/4軽石（火山灰豆石）。第ＸＸ層…暗灰色Ｎ31砂質土（牛のすね火山灰下部層）。第ＸＸＩ層…灰白色7.5ＹＲ 8/1火山灰土に砂粒がラミナ状に混入（ＡＴ層の二次堆積）。

調査の内容については、第Ⅰ層から第Ⅴ層までを重機によって掘削し、第Ⅶ層から第ＸⅡ層（一部ＸⅢ層）までの遺物包含層を人力によって層毎に掘り下げた。結果、縄文土器・弥生土器・土師器（黒色・布痕・墨書・線刻含む）・須恵器・陶磁器（国産・舶載）・木製品（未製品含む）・鍛冶関連遺物（フイゴの羽口・鉄滓・坩堝）・炭化物（木材・種子など）・石器（磨石・敲石・石斧）の縄文時代～中世にかけての遺物が約38,000点あまり出土した。

また、遺構については第ＸⅤ層上面で遺構検出を行い、溝状遺構６条・道路状遺構１本・土坑３基・井戸１基・掘立柱建物跡１棟・杭列１を検出し、土層断面で水田跡（古代・中世・近世）を確認した。

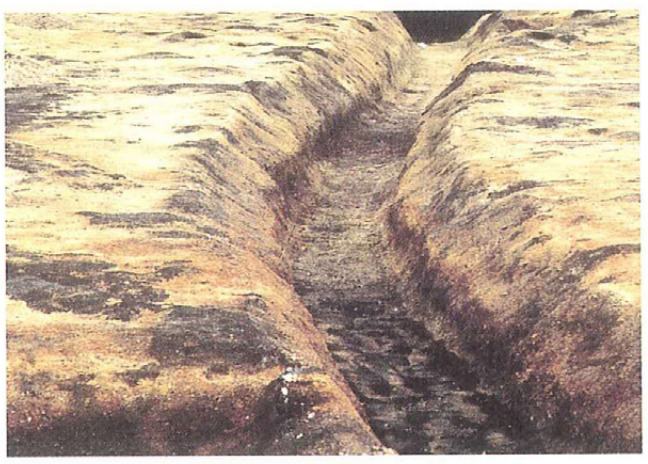
3. 真上からの遺跡全景



SB：掘立柱建物
SC：土坑
SD：溝状遺構
SE：井戸
SF：道路状遺構
SW：水田
SL：杭列
TT：トレンチ

0　10m

第2図　江内谷遺跡遺構配置図



（左）SD01完掘状況

（右）SD02完掘状況

（左）SB01完掘状況

（右）SE01完掘状況

4. 江内谷遺跡遺構完掘状況

5. 江内谷遺跡出土遺物（土師器）

6. 江内谷遺跡出土遺物（黒色土器・緑釉陶器・越州窯系青磁・墨書土器・フイゴの羽口・木製品

第４章　　坂元Ｂ遺跡の調査

坂元Ｂ遺跡は、大淀川支流の横市川右岸につくられた比較的新しい完新世段丘上（標高約146m）に立地し、調査地はシラス台地の裾部から後背低地へ落ちていく地点にあたる。調査区域の全域が霧島御池軽石におおわれていることを確認したが、その約半分の区域の軽石層は灰白色化しており、地下水の影響を受けているものと考えられる。実際、調査中において、御池軽石の上面がくぼんでいる地点では常に浸水する状況であり、遺構の床面検出に際しては、排水溝を設けながら進めなければならなかった。調査区域の北・西側の縁辺部には、霧島御池軽石層の上面が急傾斜している箇所が３地点あるが、そのエリアには泥炭層が形成されている。泥炭層中には分解されていない木本質の植物遺体（幹・枝・葉・種子類）が多く含まれていた。そのうちの２点の木片について樹種同定と放射性炭素年代を測定した結果、樹種はいずれもアカガシ亜属であり、Ｂ－11区の試料では1160±50年BP、Ｍ－３区の試料では1130±50年BPという数値が得られている。調査は霧島御池軽石の上面まで行い、上記の泥炭層については、一部をトレンチにより調査した。調査面積は約6,900㎡であり、調査期間は平成13年１月15日から平成13年３月29日までである。

遺跡の基本土層の時期は、１層が現在の水田耕作土、２・３層が近世～近代の耕作土、４層が桜島文明軽石層（15世紀後半，撹拌を受けている）、５・６層が中世・古代・弥生時代、７層が縄文時代である。

縄文時代の遺物は、後期前半から晩期後半までの土器が断片的に出土しており、それに両輝石安山岩製の打製石斧や剥片石器が伴うようである。しかし、確実に縄文時代と考えられる遺構は、晩期中頃の土器が出土した５号溝状遺構だけである。幅約１ｍで、西側は調査区域外へ延びていくが、調査区域内においては総延長約30ｍを測る。その機能や用途は不明である。

弥生時代の土器は前期から後期まで幅広い時期のものが出土し、出土量も出土遺物の全体量の過半数を占めるが、検出された遺構は後期後半の竪穴住居跡が２軒だけである。竪穴住居跡のうち１号竪穴住居跡（ＳＡ１）は壁面の４ヶ所に突出壁がみられるいわゆる花弁状住居跡である。平面プランは東半分が方形を呈しており、西半分が円形を呈している。住居跡の中央に方形プランの土坑（1.9m×1.3m）があり、その南側約50㎝の地点に灰白色をした焼土の堆積がみられた。その中央土坑の南側に大形の複合口縁壷が横倒しのつぶれた状態で出土し、それを囲むように比較的小形の複合口縁壷が３個体と単純口縁の壷が７個体、小形の高坏が１個体と小形の鉢が３個体出土している。出土レベルはいずれも覆土の下層で、床面とは１～２㎝程度の薄い堆積土を挟んでおり、竪穴住居が廃絶してまもない時期に意図的に土器群が配置されたと考えられる。石器は磨製石包丁・磨製石鏃・砥石などが出土した。２号竪穴住居跡（ＳＡ２）は北側を昭和時代に実施された耕地整理の際の削平によって失っているが、中央土坑を挟んで東側と西側に突出壁をもつ方形を基調としたプランを呈していると推定される。覆土の下層からは炭化材が出土しており、覆土の中位には、甕や壷の土器の破片が多く集積されていた。炭化材のうち１点について放射性炭素年代を測定した結果、1750±70年BPという数値が得られている。

古代・中世の遺構がもっとも多く検出された。内訳は、掘立柱建物跡７棟・土坑24基・溝状遺構９条である。土坑の中には、古代の土師器（甕や坏）の破片がまとまって出土するもの（SC02・SC04）がある。また、溝状遺構は、２号溝状遺構が台地の縁辺を取り巻くように走行する他は、台地の裾部から後背低地に向かって（南から北へ）走行するものがほとんどである。近世の遺構としては、掘立柱建物跡１棟・井戸と思われる土坑２基･溝状遺構１条を検出した。その内の井戸と思われる土坑（SC25）からは蓋状の木製品が出土している。

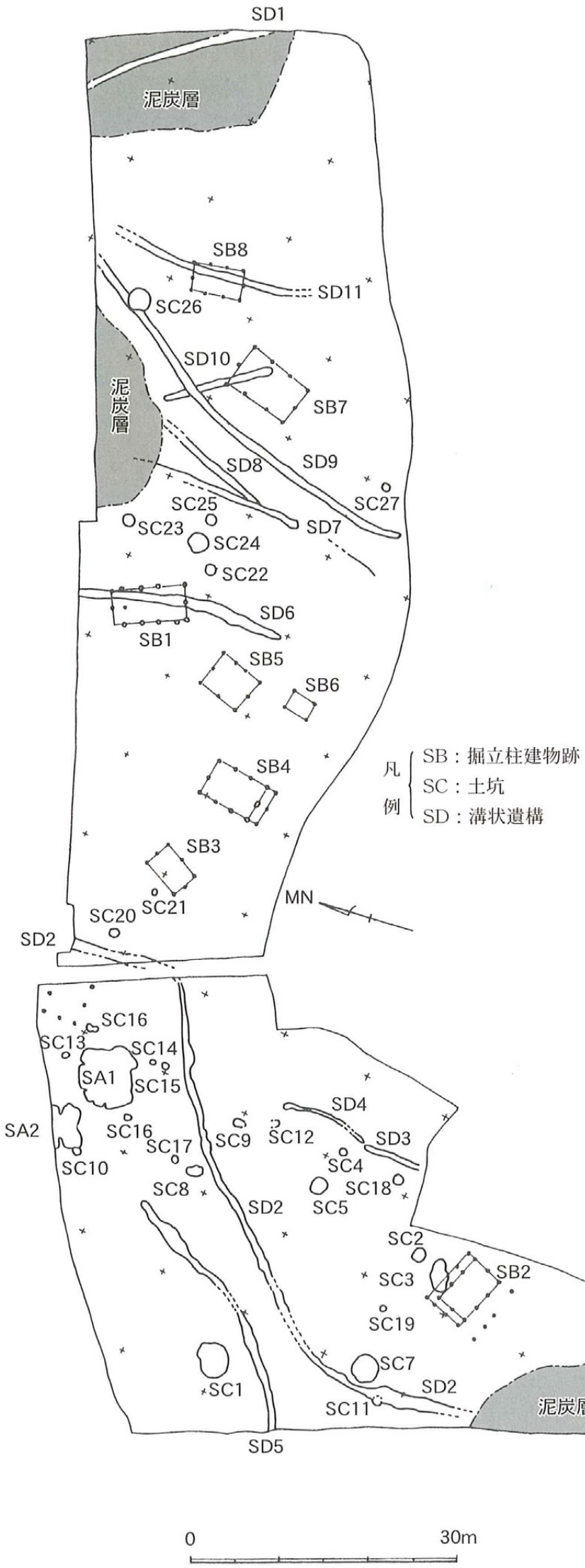


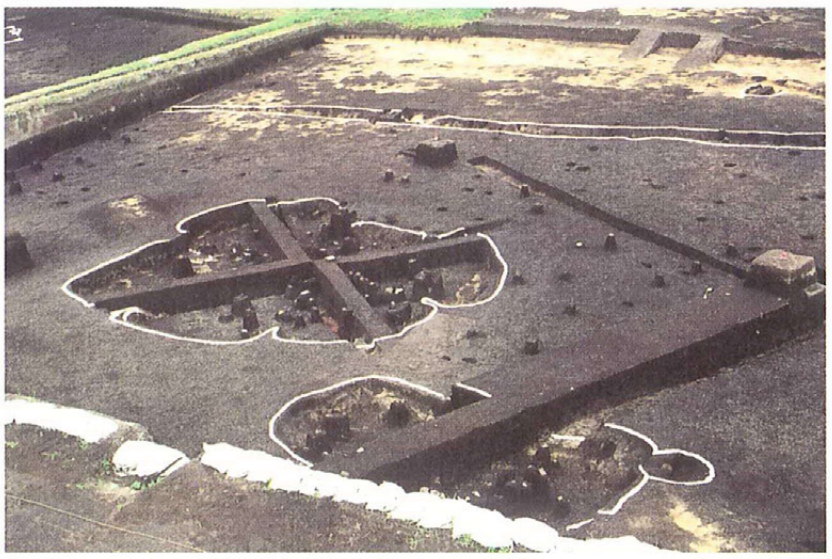
図3　坂元B遺跡遺構配置図

7. 調査区域全景（北西上空から）

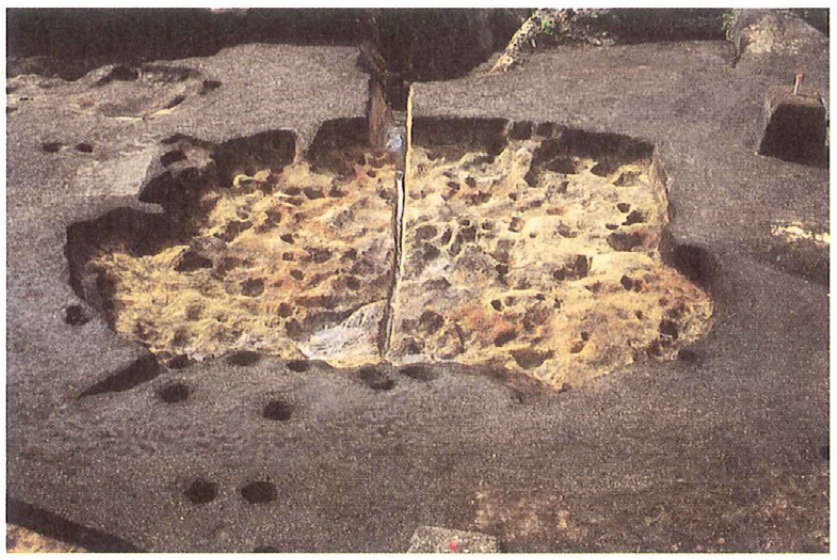
8. 調査区東側（真上から）

9. 調査区西側（真上から）

10. 5号溝状遺構［SD5］完掘状況（西から）



11. 1・2号竪穴住居跡［SA1・2］（北から）



12. 1号竪穴住居跡［SA1］完掘状況（南から）

13. 1号竪穴住居跡［SA1］内土器取り上げ風景

14. 2号竪穴住居跡［SA2］完掘状況（南から）

15. 内部に手づくね土器の入った弥生土器（壺）

16. 2号溝状遺構［SD2］完掘状況（東から）

17. 7・8・9号溝状遺構［SD7・8・9］完掘状況（北から）

18. 4号掘立柱建物跡［SB4］完掘状況

19. 22号土坑［SC22］完掘状況

20. 10号土坑［SC10］内土師器出土状況

21. 5号土坑［SC5］内土師器出土状況

22. 縄文時代晩期～弥生時代中期初頭の土器

23. 1号竪穴住居跡［SA1］出土土器（4）

24. 1号竪穴住居跡［SA1］出土土器（1）

25. 1号竪穴住居跡［SA1］出土土器（2）

26. 1号竪穴住居跡［SA1］出土土器（3）

第５章　　加治屋Ｂ遺跡の調査

加治屋Ｂ遺跡は、大淀川支流の横市川右岸につくられた完新世段丘上（標高約152m）に立地する。南側はシラス台地によって一段高くなり、西側と北側は一段低い段丘になっているため、東側以外は独立した地形となっている。調査区は現在の道路により北側と南側に分断されており、それぞれを北区・南区とした。調査面積は11,000㎡を対象とし、平成13年４月10日から平成13年３月27日にかけて行った。ちなみに、今回の調査区の東隣については平成14年度に調査を実施する予定（第２次調査）である。

縄文時代後期については土坑３基が南区で検出され、そのうち１基には土器片が集中して見つかった。

弥生時代の遺構は竪穴住居跡40軒・土坑14基・掘立柱建物１棟・溝状遺構２条が確認された。遺構は、そのほとんどが台地の縁辺部に（調査区の北から西にかけて）密集して分布している。 竪穴住居跡40軒のうち、３軒は後期後半のもので、他はすべて中期（中頃から末）のものである。平面プランは円形・方形・花弁状があり、規模は径が３m未満の小型のものや径５mを越えるものなどがある。ほとんどの住居跡に霧島御池軽石粒と黒色系土を混ぜあわせて叩き締めたと考えられる貼床の層が確認された。花弁状住居のなかには、ベッド状遺構を伴うものや中央土坑をもつものがある。それぞれの住居内からは炭化材や磨製石鏃・石鏃未製品・打製石斧・土器が出土し、北区の花弁状住居跡（YSA12）の主柱穴からは、柱を抜き取った後に埋納された土器（甕と壷）が出土した。溝状遺構は２条ともほぼ東西方向に弧を描く短いものである。そのうちの一条（YSD２）は竪穴住居跡と切り合っており、もう一条（YSD１）は、その西南方約２mの地点に２間×１間の掘立柱建物（YSB１）が確認された。包含層からは在地の土器と瀬戸内系土器や打製石斧・磨製石鏃・磨製石包丁などが出土している。

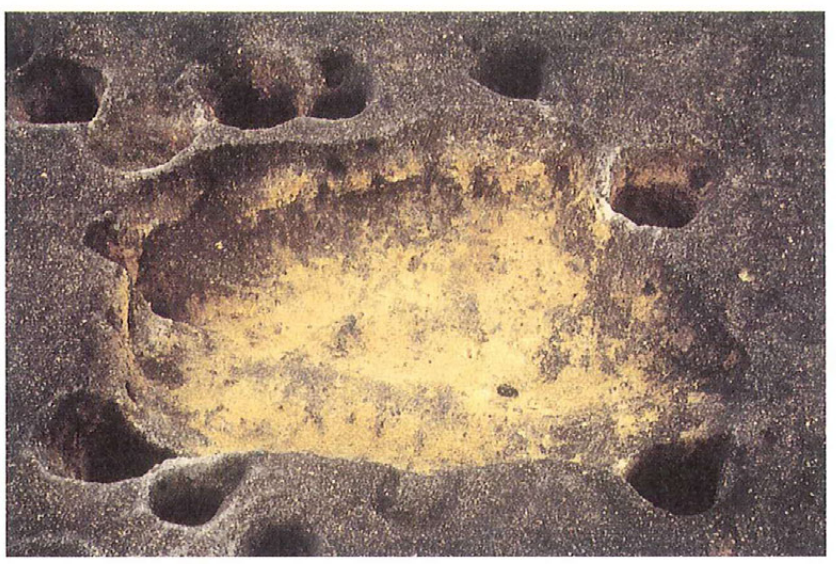
中世に関しては、掘立柱建物跡81棟・土坑175基（土坑墓・石組遺構含む）・溝状遺構13条・竪穴状遺構３基があり、調査区のほぼ全域で遺構が確認された。調査区域を南北に走る溝と、東西に走る溝は屋敷地の区画溝のようであり、屋敷地の規模は南北約120m、東西70m＋αとなる。北区のSD２からは常滑焼や龍泉窯系青磁が出土している。掘立柱建物跡は、ピットの切り合いが激しくそれぞれの建物を確認するのに苦慮したが、81棟を検出した。建物の平面プランは、３間×２間の庇なしのものが大半を占めるが、６間×２間で四面庇をもつもの（南北7.7m×東西14.5m、総面積111.6㎡）や、５間×２間で二面庇をもつ大型建物も数棟確認された。その大型建物の分布域は二つに分けられるが、この分布状況の違いは時期差を反映していると思われる。柱穴の径をみると、３間×２間のものが約30㎝であるのに対し、大型掘立柱建物の柱穴径は50㎝前後であり、柱穴内には白磁等の遺物や、抜き取り後に埋納されたとみられる土師器が入っていた。柱穴内に礎盤は入ってなかったが、底面が固くしまっている柱穴もみられた。土坑墓は主に調査区東側に分布していた。SC43は南北長方形プランで、下層からは供献とみられる完形の土師器が出土した。また、礫を方形に組み上げた石組遺構が３基検出された。そのうち２基（SC60・125）は人頭大以上の礫を土坑の底に敷き、壁面にも積み上げているが、１基（SC130）はこぶし大の礫により組まれており、石の選択が異なる。いずれも下層には薄く炭化物が堆積しており、石を積み上げる際に粘土や火山灰（シラス？）により裏ごめがされていた。石組遺構の礫は内側に面した部分のみが赤色化しており、被熱痕跡がうかがえるが、その性格は不明である。

包含層や遺構内の出土遺物には、貿易陶磁では龍泉窯系青磁を中心に、白磁の口禿げ碗と皿・褐釉陶と青白磁の合子や底面に墨書のある白磁水注・黄釉陶盤・国内産陶器は東播系須恵器や常滑焼・瀬戸系灰釉陶（おろし皿）がみられる。常滑焼は13世紀後半～14世紀前半のものであり、その器種には壷・甕だけではなく鉢もみられる。その他、滑石を転用した分銅（？）・毛彫りの施された銅製品・火打ち金もある。

27. 北区弥生竪穴住居跡群　完掘状況（南から）

28. 23号弥生竪穴住居跡［YSA23］完掘状況（西から）

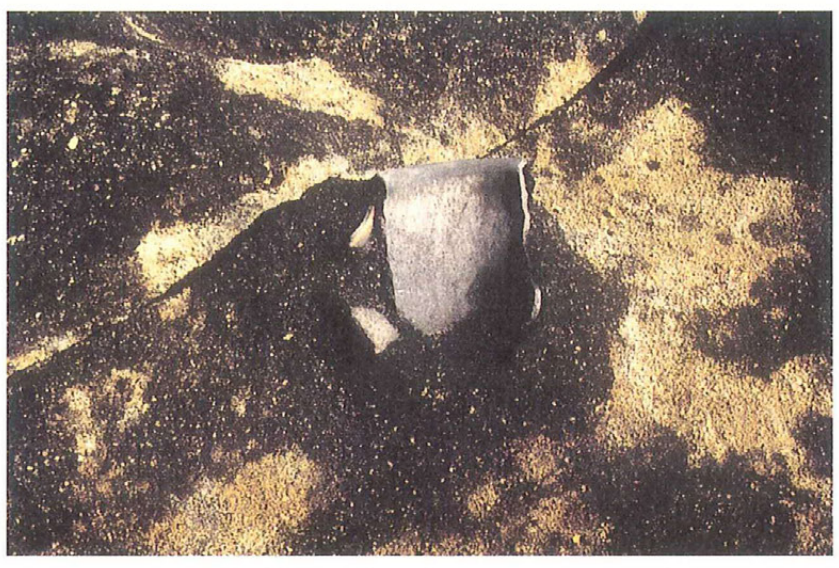
29. 11号弥生竪穴住居跡［YSA11］完掘状況（南から）



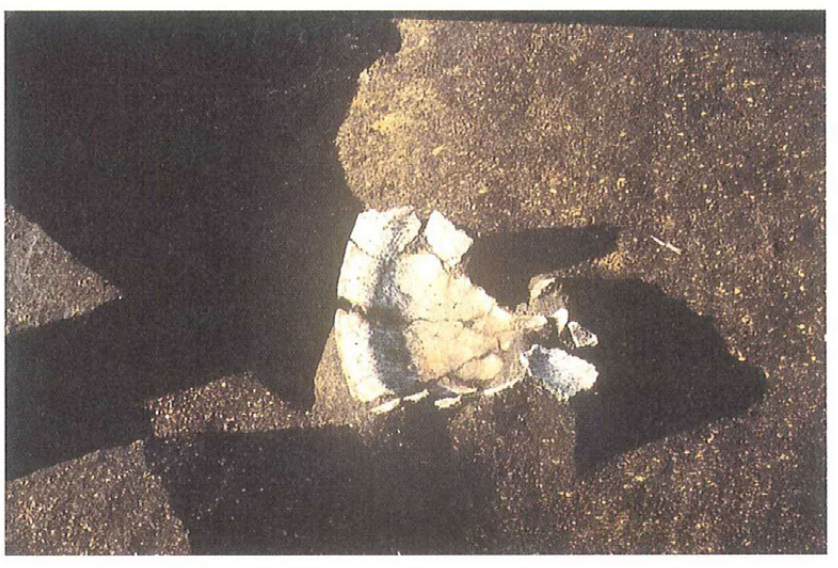
30. 6号弥生土坑［YSC6］完掘状況（西から）

31. 1号弥生堀立柱建物跡［YSB1］完掘状況（南から）

32. 16号弥生竪穴住居跡［YSA16］覆土土層遺物出土状況



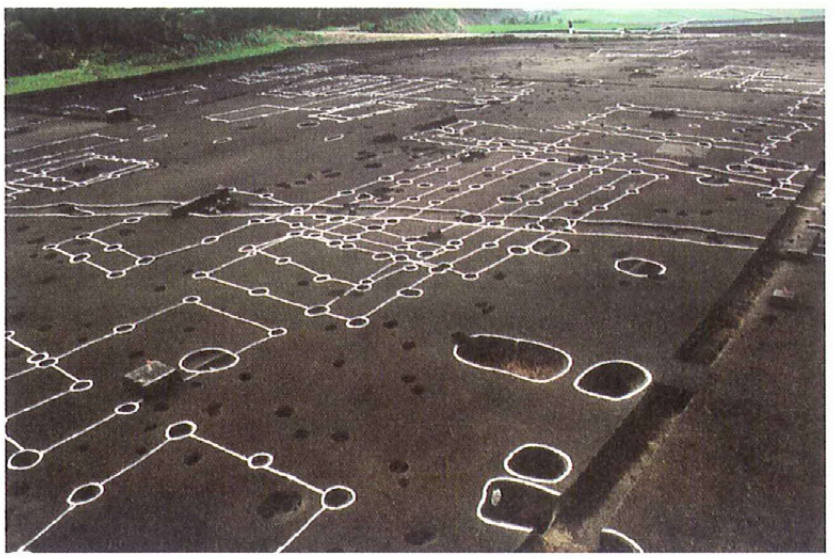
33. 12号弥生竪穴住居跡［YSA12］主柱穴内の
土器出土状況（西から）



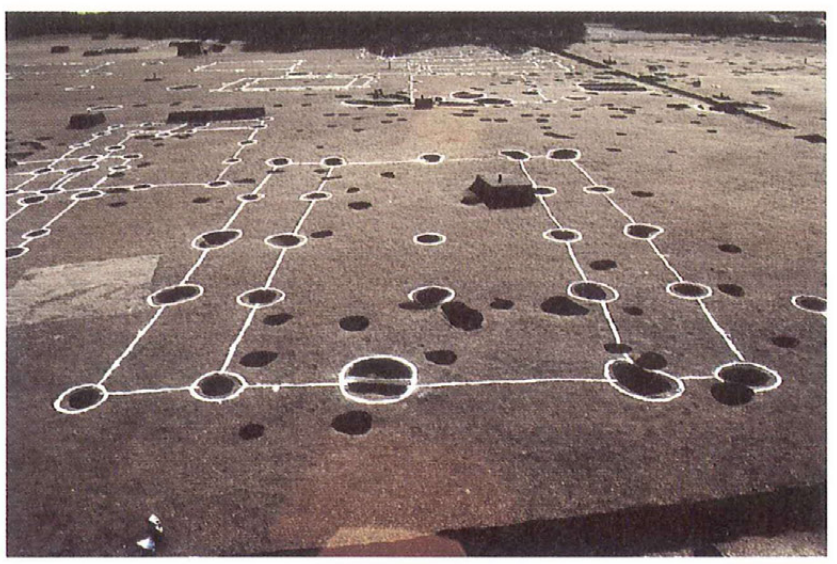
34. 25号弥生竪穴住居跡［YSA25］土器出土状況

図4　加治屋Ｂ遺跡中世遺構配置図

35. 中世遺構群全景（真上から）



36. 南区　中世遺構群（東から）



37. 29号堀立柱建物跡［SB29］（北から）

38. 1・2号溝状遺構［SD1・2］（東から）

39. 43号土坑［SC43］土師器出土状況（東から）

40. 60号土坑［SC60］完掘状況（北から）

41. 130号土坑［SC130］完掘状況（北から）

42. 弥生土器甕（YSA16出土）

43. 弥生土器甕（YSA16出土）

44. 弥生土器甕（YSA21出土）

45. 打製石鏃
（YSA18出土）

46. 弥生土器甕（YSA12出土）

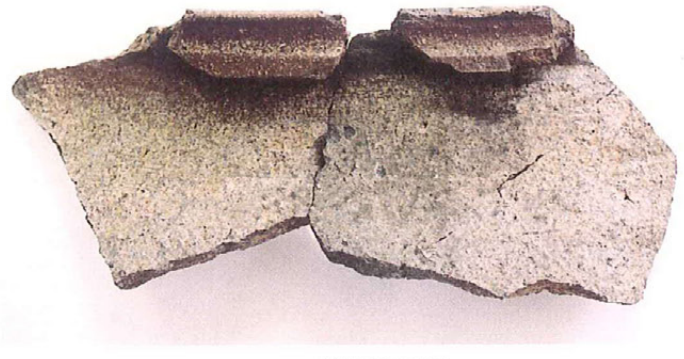
47. 弥生土器壺（YSA12出土）

48. 土師器坏・小皿

49. 龍泉窯系青磁碗

50. 白磁皿・碗

51. 黄釉陶盤・褐釉陶合子



52. 常滑焼甕

53. 青白磁合子

54. 白磁水注高台内の墨書

第６章　　馬渡遺跡・坂元Ｂ遺跡出土の初期貿易陶磁器と国産施釉陶器について

図５に馬渡遺跡と坂元Ｂ遺跡で出土したＡ期～Ｃ期の陶磁器の実測図･写真を掲載した。 初期貿易陶磁器は広域に分布しており、全国的観点で年代をとらえることができるが、都城市における遺跡での出土点数はいまだに少なく、器種もほとんど椀・皿である。その中でもさらに出土量の限られる舶載陶器は、当地域の社会的背景や流通経路の推定に、一考を投じると思われる。また、陶磁器は長期使用が可能なため、その種類、共伴する土器・国産施釉陶器などを把握することで、流通の時間差、集落・集団の差などの推定も可能かと考える。

馬渡遺跡ではＡ期に国産施釉陶器と共伴出土した貿易陶磁器だが、Ｂ期のものはなくＣ期～Ｄ期の白磁椀Ⅳ類～Ⅴ類が３点、Ｄ期の竜泉窯系青磁椀Ⅰ類・同安窯系青磁椀Ⅰ類は確認できず、Ｅ期の竜泉窯系青磁椀Ⅱ類（旧Ⅰ－５類）がわずかに出土する。Ａ期に国産施釉陶器と共伴出土した貿易陶磁器だが、その後の断絶が認められる。他方、坂元Ｂ遺跡ではＡ期の国産施釉陶器（緑釉)、白磁椀Ⅰ類（特に皿Ⅰ－１ｂは北方白磁としては初見である。)、Ｂ期の白磁椀ⅩⅠ類、Ｃ期の白磁椀Ⅱ類・Ⅳ類、Ｄ期の白磁椀Ⅴ～Ⅷ類が確認されると共に、竜泉窯系青磁椀Ⅰ類と同安窯系青磁椀Ⅰ類も出土し、時間的継続性が看取される。また、少し様相が異なる例として肱穴遺跡では、Ｃ期の白磁椀Ⅳ類の破片数43片、Ｄ期の竜泉窯系青磁椀Ⅰ類と同安窯系青磁椀Ⅰ類は18片と白磁椀Ⅳ類がより多く出土した。遺構に伴わない包含層一括遺物ではあるが、山本信夫氏が指摘したように白磁椀Ⅳ類がＤ期まで残る傾向を示しながらも、単独で搬入された時期の存在を考える良い例と考える。その他、横市川流域では、正坂原遺跡でもＣ期～Ｄ期の白磁椀Ⅳ～Ⅴ類が出土し、他にＤ期の同安窯系青磁椀・皿Ⅰ類、龍泉窯系青磁椀・皿Ⅰ類も出土している。特に同安窯系青磁は市内の他の遺跡に比べ多く出土しているようであり、Ｄ期には白磁が減少していくものと考えられる。青磁壷や青磁水注等はより古い時期のものとも考えられるが、越州窯系青磁椀の出土はないようであり、やはりＢ期に位置付けるのが妥当であろう。なお、大淀川本流域には、Ａ期の越州窯系青磁椀・白磁椀Ⅰ類・国産施釉陶器（緑釉陶、灰釉陶）などを出土した大島畠田遺跡があり、その出土の多さは県内でも比類がない。

坂元Ｂ遺跡で減少したＤ期以降の貿易陶磁器は、東側に立地する加治屋Ｂ遺跡で増加する。特にＥ期の龍泉窯系青磁椀Ⅱｂ類（旧Ⅰ－５ｂ）は、１次調査の段階で破片数約180片（口縁102片）を数え、Ｆ期の白磁椀Ⅸ類（口禿げ椀､皿）は破片数約80片を確認した。その他常滑焼の甕・壷・鉢、東播系の壷・甕類等もみられ、いずれも13世紀中頃～14世紀初頭に集中する。この時期における周知の遺跡の中でも、豊富な出土量となっている。現時点ではどの遺跡でも破片数のカウントに留まり個体数を求めるのは困難であるが、増えつつある各遺跡の貿易陶磁器を継続的に分類し、検討を加えていくことで流通経路や広域的なネットワークなどが見えてくると思われる。

【参考文献】

太宰府市教育委員会　2000　太宰府市の文化財第49集『大宰府条坊跡ＸＶ』
宮崎県埋蔵文化財センター　2000　宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第28集『大島畠田遺跡』
都城市教育委員会　1993　都城市文化財調査報告書第25集『正坂原遺跡』
都城市教育委員会　1999　都城市文化財調査報告書第47集『肱穴遺跡』
都城市教育委員会　2001　都城市文化財調査報告書第55集『横市地区遺跡群』

馬渡遺跡掲載遺物一覧

挿図番号	遺物番号	グリッド遺構	層位	種類	器種	法量 口径	法量 低径	法量 器高	特徴	備考
1	779	K－5	4	白磁	椀	－	6.8	－	角高台、釉はややつやのない乳白色	白磁椀Ⅰ類
2		O－4	4	白磁	椀	－	5.6	－	底部の器肉は厚い（高台の刳りが浅い）	白磁椀Ⅳ類
3	597	I－6	5	白磁	椀	－	6.2	－	見込み際を打ち欠いて転用、摩滅が激しい	白磁椀Ⅴ類（一括と接合）
4		D－4	4	青磁	椀	－	8.2	－	内面見込みに目跡	越州窯系
5	364	H－8	5	青磁	椀	16.2	6.8	5.7	巾狭の蛇の目高台、全面施釉後畳付端釉削り見込み、畳付に目跡	越州窯系（410.502接合）
6	715	H－8	5	青磁	椀	18.2	6.8	6.7	円盤高台、外面下半まで施釉　内面、高台端部に目跡化粧土	越州窯系（1397､他接合）
7	825	J－5	5	緑釉	Ⅲ	13.6	－	－	内・外面に施釉、暗緑色に発色　焼成ムラ有り	洛西系（829、他接合）
8	945	J－5	5	緑釉	Ⅲ	－	8.4	－	削り出し高台　内面に重ね焼き痕有り	洛西系
9		J－5	5	緑釉	Ⅲ	－	6.4	－	削り出し高台、内面に重ね焼き痕有り	洛西系
10	359	H－8	5	緑釉	Ⅲ	14.4	6.4	2.9	高台は蛇の目高台か高台際釉剥ぎ、見込みにも釉抜け（重ね焼きか）	洛西系（No.360他接合）
11	891	H－5	5	灰釉	椀	－	7.4	－	角高台（付け高台の調整は丁寧）	釉の残存はない
12	1540	I－9 KB－3	5 b	灰釉	瓶	－	9.8	－	長頸瓶（高台内ヘラ削り調整） H－8 No.678他接合	残存部外面は、無釉

坂元Ｂ遺跡掲載遺物一覧

13	85	D－10	5	白磁	椀	－	－	－	小さな玉縁口縁、胎土は白く釉も白色	白磁椀Ⅰ類
14		F3～J3 トレンチ		白磁	椀	18.2	－	－	細い玉縁口縁、外面中位以下ヘラ削り	白磁椀ⅩⅠ類（ⅩⅠ－2）
15	3733	K－3	5 a	白磁	椀	17.4	－	－	細い玉縁口縁、貫入多い	白磁椀ⅩⅠ類（ⅩⅠ－1か）
16	3647	F－5 SC－06	5 b	白磁	椀	17.0	－	－	扁平な玉縁口縁、体部器壁は他のⅣ類に比べて薄手	白磁椀Ⅳ類（Ⅳ－2ｃ）
17	4	L3～L4 トレンチ		白磁	椀	17.6	－	－	肉厚の玉縁口縁、施釉は外部上位まで	白磁椀Ⅳ類
18		F－4	5	白磁	椀	－	－	－	細い玉縁口縁、釉は薄くかかり、貫入有り	白磁椀Ⅱ or Ⅳ
19		Ⅲ区ア		白磁	椀	－	－	－	直口口縁	白磁椀Ⅴ～Ⅷ
20	399	D－9	5	白磁	椀	14	－	－	口縁が少し外反する体部は丸みを帯びる	白磁椀Ⅴ類（Ⅴ－1）
21	790	I－3	5	白磁	Ⅲ	15.2	－	－	輪花口縁、器壁が厚い堆線は白堆ではなく稜線タイプ	白磁ⅢⅠ－1ｂ（北方白磁）
22		J－4 SC02		白磁	Ⅲ	13.4	－	－	薄い器壁、硬質で精良な胎土	白磁ⅢⅠ or ⅩⅠ
23		Ⅲ区イ	排土	白磁	Ⅲ	13.0	－	－	体部外面下半以下無釉	白磁ⅢⅡ類
24	546	H－3	5	青白磁	合子	5.2	－	－	坩形合子身、釉は薄い空色	
25	3040	L－3	2 b	青白磁	合子	7.8	7.6	1.7	合子身、外面中位ぐらいまで施釉	
26	1007	F－3	5	青磁	椀	14.6	－	－	直口口縁、体部はやや丸みを持つ	越州青磁 Ⅰ or Ⅲ
27	620	H－2	4	緑釉	Ⅲ	－	5.6	－	蛇の目高台風な高台、見込みに重ね焼き痕	洛西系

太宰府編年

馬渡遺跡

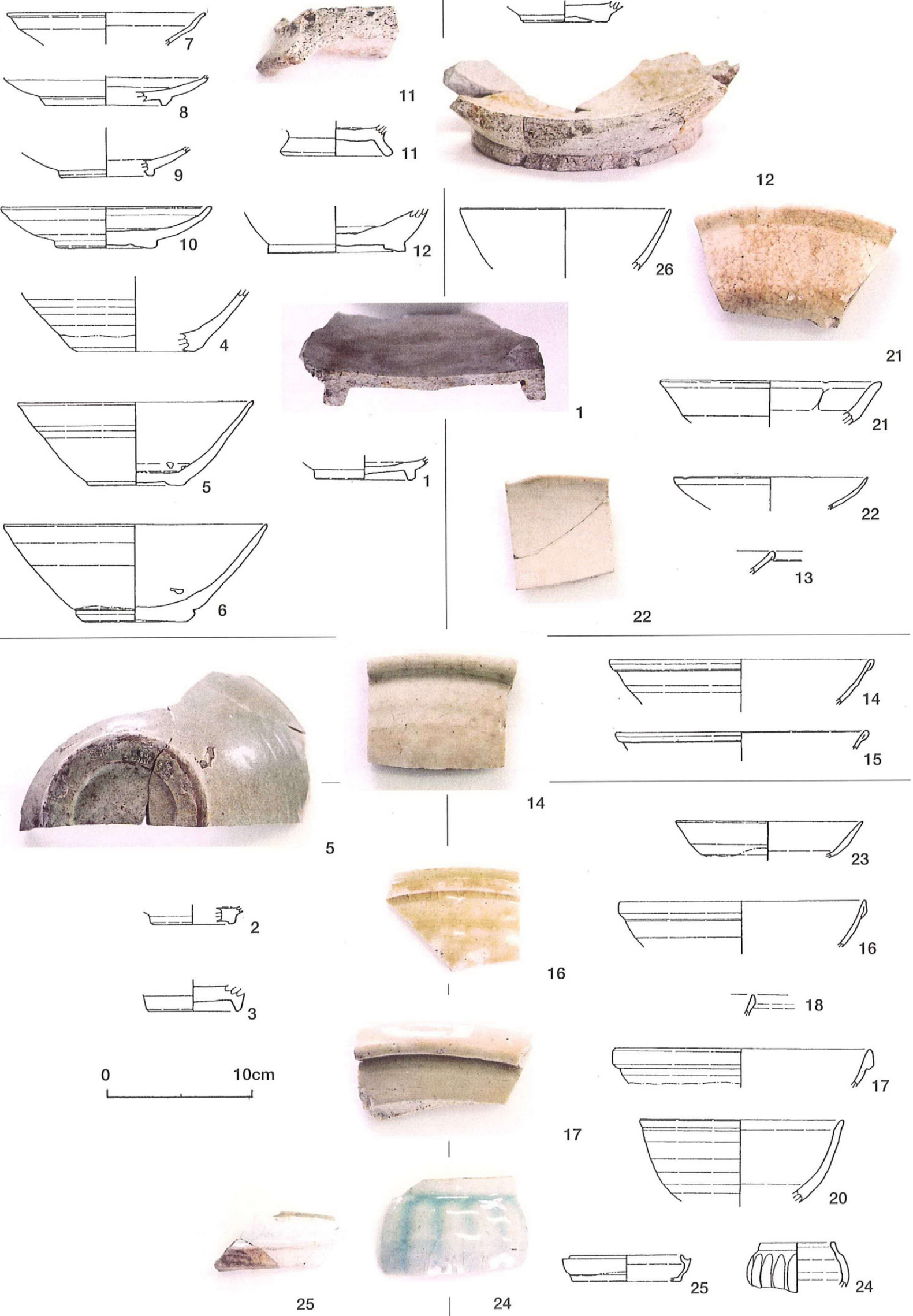
坂元B遺跡

A期

B期

C期

D期



※ 1～3、13～23：白磁
4～6、26：青磁
24・25：青白磁
7～10、27：緑釉陶
11・12：灰釉陶

図5　馬渡遺跡・坂元B遺跡出土の初期貿易陶磁器と国産施釉陶

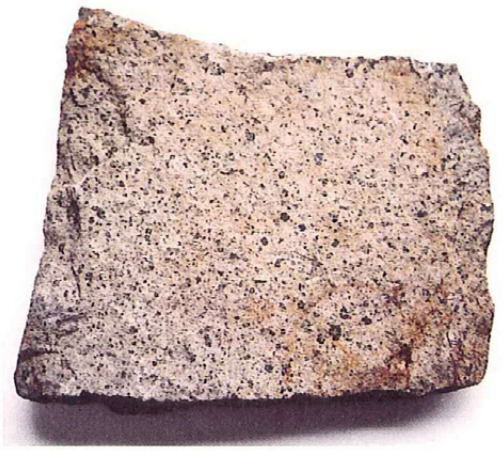
番号は17ページの一覧表と一致する

第７章　　横市地区遺跡群出土の石器の石材について

都城市内遺跡の石器については、これまで個別の遺跡ごとに地質分野の方々の鑑定を仰ぎ、各報告書中に記載してきたが、近年、各時代の資料が増加する中で、統一的な分類の必要性が生じてきた。

本年度、横市地区遺跡群出土の石器について石材の同定（宍戸　章氏による）を実施したので、今後の便宜も考慮して、同定石材の写真を掲載し、それらの資料の器種と出土遺跡・地点を付記した。今回はあくまで中間報告という形であり、同定手法についても肉眼での鑑定であることから、石材の同定結果をはじめその産地については、今後の成分分析などの進展によって、変更されることは十分にありうることを断っておく。以下、主な石材について、その特徴と推定される産地を記載する。

① **砂岩**　主に古第三系四万十累層群に属するもので、細粒から粗粒まで各種ある
　産地…都城盆地周辺（高城町～山之口町～三股町～都城市）など
② **頁岩**　黒色で薄く剥離するものや粗粒のシルト岩質のものがある。
　産地…①と同様の地域
③ **凝灰質頁岩**　四万十累層群に属する塩基性凝灰質岩で、赤色や緑色を呈しなめらか（研磨しやすい）
　産地…都城市内（下水流など）および都城盆地周辺（高城町～山之口町～三股町）など
④ **ホルンフェルス**　いずれも泥質岩源で、微細な黄褐色～白色斑（菫青石？）を含むものもある
　産地…宮崎県内では市房山（西米良村）周辺、木城町石河内方面、大崩山（北方町）周辺など
　　鹿児島県では大隅半島の高隈山周辺などの可能性あり
⑤ **チャート**　珪質な円礫で、宮崎県北部産とは少し異なる
　産地…都城市高野方面の白亜系四万十累層群由来の河床礫、あるいは都城盆地南東部の古第三系礫岩中の礫？
⑥ **安山岩類**
1　**両輝石安山岩**（複輝石安山岩）　a：灰色地に黒色の大きめの斑晶のみられるもの
　　産地…鹿児島県末吉町の高之峰産の可能性あり、都城市母智丘にも類似のものあり
　　b：黒色地に白色斑があり、多孔質なもの（霧島新期溶岩類）
　　産地…高原町～都城市
2　**無斑晶質安山岩**　黒色を呈し、緻密～ガラス質で斑晶は少ない　いわゆるサヌカイト的なもの
　産地…大分・熊本県などの瀬戸内系火山岩類の可能性大



両輝石安山岩a　[坂元B、M-4、Va、No,3326]
※灰白色地に黒色の大きめの斑晶がみられる

両輝石安山岩a　[坂元B、D-10、Va、No,112]

[加治屋B, N-6, V, No,2020]
両輝石安山岩b（霧島新期溶岩類）
※黒色地に白色斑があり、多孔質

細粒砂岩　[坂元B、F-4、SA01、3、No,3976]

細粒砂岩　[坂元B、I-3、Ⅶa、No,3763]
※長石やや多く含む

中粒砂岩　[坂元B、G-4、V]

頁岩 ［坂元B、F-4、SA01、1、No,4012、4320］

チャート ［加治屋B、N-7、V］

［坂元B、F-4、SA01、3、No,3999］
凝灰質頁岩（緑色珪質頁岩）

［加治屋B、O-3、Ⅵ、No,601他］
凝灰質頁岩　（緑色珪質岩）

無班晶質安山岩 ［坂元B、J-2、Ⅶa］

石英 ［加治屋B、R-5、V、No,569］

石英班岩 ［坂元B、I-2、V、No,734］

シルト岩 ［坂元B、D-10、Ⅲ、No,95］

頁岩源ホルンフェルス ［加治屋B、Q-10、Ⅵ、No,2263］
※黒色微細斑点あり

頁岩源ホルンフェルス ［坂元A、K-4、6b、No,384］
※白色微細斑点あり

［坂元A、I-5、7a、No,420］
頁岩源ホルンフェルス
※表面微細凹凸あり

［加治屋B、M-4、YSA23、No,3876他］
頁岩源ホルンフェルス
※黄褐色微細斑点（菫青石？）あり

報告書抄録

書名	横市地区遺跡群（よこいちちくいせきぐん）
副書名	
巻次	
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第58集
編著者名	桑畑光博・下田代清海・原田亜紀子・外山隆之・大盛祐子
編集機関	宮崎県都城市教育委員会
所在地	宮崎県都城市姫城町６街区21号
発行年月日	2001年３月30日

所収遺跡名	所在地	北　緯	東　経	調査期間	面　積	調査原因
江内谷（えないだに）遺跡	宮崎県（みやざきけん） 都城市（みやこのじょうし） 蓑原町（みのばるちょう） 字江内谷（あざえないだに）	31° 44′ 14″	131° 01′ 27″	2000年11月24日 ～ 2001年３月29日	1,400m²	農業基盤整備事業（県営ほ場整備事業）
坂元（さかもと）Ｂ遺跡	宮崎県（みやざきけん） 都城市（みやこのじょうし） 南横市町（みなみよこいちちょう） 字坂元（あざさかもと）	31° 44′ 19″	131° 01′ 32″	2001年１月15日 ～ 2001年３月29日	6,500m²	
加治屋（かじや）Ｂ遺跡（第１次調査）	宮崎県（みやざきけん） 都城市（みやこのじょうし） 南横市町（みなみよこいちちょう） 字加治屋（あざかじや）	31° 44′ 21″	131° 01′ 34″	2001年４月10日 ～ 2002年３月27日	11,000m²	

遺　跡　名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
江内谷遺跡	集落跡 水田跡	平安時代 中世	掘立柱建物跡 竪穴状遺構 土坑 溝状遺構	土師器 墨書土器 越州窯系青磁 緑釉陶器 木製品	谷地形から多量の遺物が出土した。
坂元Ｂ遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代 中世 近世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝状遺構	縄文土器 弥生土器 石器 土師器 陶磁器	幅広い時代の遺物が検出された。
加治屋Ｂ遺跡（第1次調査）	集落跡 館跡	縄文時代 弥生時代 中世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝状遺構 石組遺構	縄文土器 弥生土器 石器 土師器 陶磁器	鎌倉時代後期の大規模な館跡が確認された。

都城市文化財調査報告書第58集

横市地区遺跡群

江内谷遺跡・坂元Ｂ遺跡・加治屋Ｂ遺跡（第１次調査）

県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う遺跡の発掘調査概要報告書

2002年3月

編　集　　宮崎県都城市教育委員会

発　行　　〒885-8555　宮崎県都城市姫城町６街区21号

ＴＥＬ(0986)23－9547　ＦＡＸ(0986)24－1989

印　刷　　株式会社　都　城　印　刷

〒885-0055　宮崎県都城市早鈴町1618番地